

純粹読者とは 武富純一

十一月二十日の朝日歌壇「短歌時評」で大辻隆弘が昨年度の現代短歌評論賞、雲嶋聆「黒衣の憂鬱―編集者・中井英夫論」の一部に疑問を投げかけた。

雲嶋は「現代短歌は斜陽文芸であり、その原因は純粹読者がいないことだ」と述べ、純粹読者がいる小説と比較し「その獲得こそが現代短歌の課題ではないか」という。

これに対し大辻は「短歌は小説の消費モデルとは違う」として「古来、短歌は座の文芸であり、短歌表現は歌を作りたいという自覚を持つ読者によって研ぎ澄まされてきた。作者⇨読者という共同体があるからこそ短歌は表現水準を維持し得たのだ」と反論し、「歌作に興味を持つ人を掘り起こすのは歌人の責務だと思うが、それは歌を消費する傍観者を作ることではあるまい。作者と読者の関係はどうあるべきか、慎重な考察が必要だ」と結ぶ。

記事から四日後、雲嶋は大辻の声に素早く反応し、自身のブログで、純粹読者を求める理由として「実作者⇨読者」という閉じられた世界のみでは血が濃くなってしまい、どんどん言葉が痩せていくのではないか」という恐怖感を述べる。

さらに古今東西のジャンルを超えた芸術交流の例を挙げ、このままでは短歌は「短歌村にしか通用しない言葉で作られた、高度なゲーム」か「ふっとしたことでツイートするように作る

五七七七七の吹き」になってしまいう気がするとして「どちらになってもそれは文芸とは呼べない」と、他ジャンルの血を入れて短歌を再生して欲しいと思いを返している。

相前後して大辻自身が多くの続編をツイートしたこともあり、ツイッター上に瞬く間に「純粹読者」論議が巻き起こり、本議論を飛び越えてしまったような広範な意見も並んだ。

端的にまとめると「私は現代短歌が好きだけど自分じゃ全く詠めない純粹読者」「小説と違って短歌は読み手から読み手へのハードルが低めかつ高速」「語呂がしっくりこない。読み専とかでは?」「短歌は「サラダ記念日」で一度は純粹読者を獲得してるからね」「純粹読者歴ゼロ年、けっこう多いんだ」「純粹読者を熱望する不純作者という構図」「純粹読者より必要なのは、短歌の外に出ていこうとする不純作者なのでは?」などだ。

大辻はその反応ぶりに「私は純粹読者が少ないことがなぜ斜陽としてマイナスにとらえられねばならないか」を問うているだけだ」とし、「なぜ実作をしない純粹読者の多寡という基準で「主要文芸⇨斜陽文芸」を測るのがわからない」と言う。

また「純粹読者」ではなく「読者」と表していたら何のひっかかりもないのだが、とも加え、前後して第二芸術論や前衛短歌からの流れも交えつつ、純粹読者とは「実作をしない短歌購読者」ではなく「広範な芸術的造詣を持った知識階級の享受者（ただし実作はしない）」イメージなのだと述べている。

菱川善夫亡き後、大辻の示すところの「純粹読者」に私はまず東郷雄二が浮かぶのだが、はたして現在、そんな人はいったいどれくらいいるのだろうか。